南陽市小中学校

適正配置等検討委員会だより　第2号

令和6年6月16日発行　検討委員会事務局（学校教育課・管理課）

教育委員会において適正規模・適正配置の方針や計画を策定する際の参考とするため、幅広く意見等をお聞きするため、第1回検討委員会（令和6年2月29日開催）を開催し、児童生徒の現状や施設の現状や将来的な維持経費の見込みについてお示ししました。

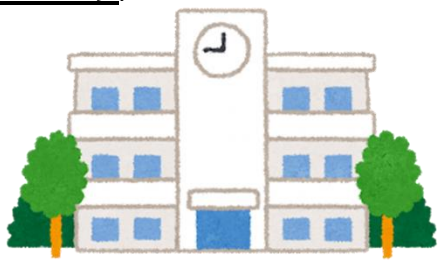
このたび、令和6年4月25日に第2回検討委員会（以下、「委員会」という。）を開催し、本検討会の役割について再確認するとともに市が描く教育の将来像について説明しながら、現状での課題等について様々な視点から意見をいただきました。

第2回検討委員会について

【第2回会議の内容】

・第2回　南陽市小中学校適正配置等検討委員会　令和6年4月25日開催
・主な議事
　1　検討委員会の役割について
　2　子供たちにとって望ましい学習環境について
　3　今後の見通しについて

委員会では、上記の議事について協議を行いました。委員からの意見や質問などについて、以下、概要を掲載します。（**議事録を市のホームページに掲載しています**）
※ 発言内容をまとめるなど文言を整理して掲載しています。



委員会での主な意見・質問

（質問）

Q.　平成 19 年度中学校再編時において、当時の適正規模の方針として具体的な学級数が示されていたわけだが、「学級数」以外の具体的な策定内容というのは何かあっただろうか。あれば参考になると思う。

A. 策定内容の中心は学級数を基準とした方針であったが、それに加えて
「適正規模並びに通学距離の公平性を考慮することが望ましい」ということと、
「統合を行う場合は該当校のいずれも対等的な統合ということで設置するのが望ましい」
という記載があった。

Q. 「子どもにとって望ましい学習環境」として、「地域総合型教育」「幼保小中一貫教育に適した環境」とはどういうことかを、今やっている事業と併せて説明してほしい。

A.「地域総合型教育」は、地域の教育力を連携・連動した取組を進めることで、子供はもちろん、地域も活性化していくことを目指した取組み。

この「地域ネットワーク」に幼保小中も含まれており、幼保⇔小、小⇔中と連携することで、子どもの育ちや学びを「輪切り」にせず、連続的に捉えるということを進めている。

実例として、小規模校であっても地域の中での活動が行われているが、さらに多様な学びの機会を得たり、学ぶフィールドを広げたりすることを考えていく必要がある。

（補足）小学校の先生に中学校で道徳の授業をやってもらったことがある。逆に、中学校の先生が小学校に出向いて専門性を生かした授業を行うことをやっている。お互いに補完することが大事。

Q. 荻小と宮内小が統合されて 1 ヶ月。統合前から積極的な交流をしていたおかげで旧荻小の児童もスムーズに入っているようだ。小規模校では多様な選択肢が限られる一方、学習面では個人へ丁寧に指導してもらえる面も。一方、大人数に早い段階で慣れることも大事。今の段階で（統合後の）宮内小の様子は教委へ上がってきているか。

A.（移行期間の取組みを経て）大きく「戸惑う」子は少なかったと聞いている。荻小から来た児童を「お客様」として迎えるのではなく、一緒の仲間として新しい歴史を作っていくということを教職員全体で確認しており、不安や心配事を持っている子どもや保護者がいればきちんと対応している。

Q. 勉強をするにあたり、1学級に何人くらいの子どもがちょうど良いと考えているか。

A. 現在、本県では、教育山形「さんさん」プランということで 1 学級 33 人として基準を示しているが、実際は、30 人を超えると「ちょっと多いな」という感覚。1 クラス 20 人台くらいがちょうど良いと感じる。小学校では、2～3 学級あれば、6 年間でクラス替えもしながら様々な子ども同士の触れ合う機会も多くなると思う。

Q. 部活動の地域移行について、学校としてはどう考えているか。また先生にもパートタイムの方が多くなっていると聞く。その辺の状況はどうか。

A. 部活動の地域移行については、現在、国の方針として、休日の部活動を自ら選んで取り組んでいけるような体制づくりを進めている。

市内 3 中学校は、部活動の加入については「任意」とし、主体的に選択できるような環境を学校や地域において整えている状況。

2 点目に関しては、全国的に教員不足の状況であり、育児休業や産前産後休暇に入

る先生方に代替する教員が充てられない状況が発生している。代替教員がついても「非常勤」という例もある。

（意見）

・　経験上、学校の規模が小さくなると、教員の数も減少するため、カリキュラム等の自由度が少なくなってくる。また、教員の負担も増える。子ども達の将来を考えると、カリキュラム等の自由度が確保できる規模があった方が良い。

・　日本の人口、最高で 1 億 2000 万人が 2100 年度には 6400 万人に減少する見通し。人口減少が大変だというのを痛感している。
　今後は、メリットデメリットは多少あるだろうが、統合を進めていくことは必要。あわせて、地元に残ってもらえるような教育をすすめていければ良い。

・　子どもが小滝小と荻小・荻小と宮内小、両方の統合を経験した。子ども達の小学校生活は小規模校ではあったが、一人一人先生方から手厚くしてもらいとても幸せだった。子どもに聞いても、学校生活で一番楽しかったのは、「小学校」と言う。ただ、統合後は少し慣れる時間が必要な部分も。複式学級も、複式ならではの良さもあると思う。今回の荻小の人数はさすがに統合やむを得なかったと思うが、児童数が少ないから絶対ダメということはなく、小規模校での経験をうまく活かせると良い。

・ 今後の南陽市の人口推移を見る限りでは、中学校は一つになるのが良いのではないか。

・　子どもが現在中川小で、学年に男女 1 名ずつの 2 名しかいない。複式学級は、人に教える経験もできるところに良さがある。子ども達は、学年を超えて仲が良く、先生も子ども達に目をかけてもらえるので、小規模校が悪い所ばかりということはない。ただ、現実問題、1 学年 2 人ではやはりできることが限られる。ましてや「男女」なので、同性同士の関わりは学年を超える。そういう意味では、統合は進めるべき。

・　漆山小は複式にはギリギリなっておらず、1 学年 10 名程度で 1 クラス。学校の雰囲気は昔に劣らず活気があると感じる。先生にも一人一人に目をかけていただいておりとても良い。
　しかし、ひと学年 10 名を切ってこようとしているので、将来的には統合にせざるを得ないのではと考えている。地域の良さを知る、地域と関わっていくという部分をふまえての統合が望ましい。

・　子どもの教育を考える上では、先生の働く環境も同時に考えていく必要があるのでは。適正な人数、適正なクラスで先生と子ども達との環境の調和をはかっていく、ある程度余裕のある環境は大事。

・　小学校をいくつか回る機会があったが、少子化の問題、南陽市の出生数の減少はどの学校でも危惧しており、大きな問題と感じている。また、市内学校施設の老朽化も目立つ。
　小さいところから大規模校へ入った場合、子供にしてみても不安があったり、親にしてもいじめ等の心配もある。高校を卒業する頃になって、大規模校で過ごす不安や悩みがあったと吐露した方もいた。学校がある程度以上の規模になることが良いことばかりではないが、適正配置の検討は避けては通れないと感じる。

・　子ども達が地域との関わりがあるといっても、多くの地域住民にとっては学校の様子は見えにくいもの。回覧で回ってくる「学校だより」が情報源である程度。
　その中で気になっているのは、学校の衛生面。最近は児童が少ないので、地域の人に来てもらい清掃ボランティア等を実施しているが、（校内で分担すると）小学生がたった１人でトイレ掃除をしなければならなかったり、５人で体育館の掃除をしたりする現状がある。地域のボランティアが入ってやっと学校をきれいに保てている状況といえ、統合の話も本当に避けられない段階にきていることを実感している。

・　小規模校の子ども達は、1人1人の責任が大きいのでいろんな体験ができている。また地域の中で地域の方に育ててもらっていたと感じる。例えば荻小や中川小が統合でその地に子ども達がいなくなると、その地域との関わりが希薄になるので、「地域総合型教育」の中で、地域の伝統などの大切なものを、どうつないでいくかということを考えていかなければならない。

次回の検討委員会について

▸会 議 名　　**第3回　南陽市小中学校適正配置等検討委員会**

▸開催日時　　**令和6年6月27日（木）　19時00分から**

▸開催場所　　**南陽市役所　4階　大会議室**

▸議　　題　　**・第2回の検討委員会を踏まえた論点の整理**
・国基準の適正規模等について

【問い合わせ先】

適正配置等検討委員会事務局

▸南陽市教育委員会事務局　学校教育課・管理課

▸TEL　40－3211（代表）

検討委員会の開催概要や議事録は、南陽市教育委員会のウェブページでも掲載しています。
（南陽市小中学校適正配置等検討委員会のページ）
http://www.city.nanyo.yamagata.jp/kyoui/5564
※右の QR コードから上記ページへ飛べます→